

図書館だより

No.45(平成21年2月2日)

〈目次〉

ノーベル賞の陰で……………1
 本学附属図書館の課題……………2
 分館長に任命され十年が経過……………3
 上瀬野の四季* 随想……………4
 読書感想文コンクール[優秀賞]
 『生態系ってなに?』を読んで……………5
 「天守物語」を読んで……………6
 「チーズはどこへ消えた?」を読んで……………7
 図書館優秀利用者表彰……………8

巻頭言

ノーベル賞の陰で

学長 今村 詮

2008年度の日本人ノーベル賞受賞者は4名という大変嬉しい話でもりあがった（一応南部陽一郎先生も日本人と数えて）。私が、1966年に米国のコーネル大学のホフマン研究室（このホフマン先生も私の恩師である福井謙一先生と一緒に1981年にノーベル化学賞を受賞している）に留学したとき、同じ研究室にドイツからきたグライター博士（のちにHeidelberg大学の有機化学の教授になっている）から、日本人は何人ノーベル賞を貰っているかと聞かれ、小さい声で「Only Two」と答えたら、彼は「ドイツも落ちぶれた。以前は毎年ノーベル賞を取っていたのに」と嘆かれ、自然科学の分野での格の差を見せつけられたことを思い出す。ちなみにその当時の日本人ノーベル賞受賞者は、1949年の湯川秀樹博士、1965年の朝永振一郎博士の二人である。今回の4人受賞はまさに感慨無量の感がある。私は、この一番大きい要因は、研究者の裾野の広がりであると思う。簡単にいえば、裾が広いほど山の頂上は高くなるということである。言い換えれば、多くの無名な研究者の地味な努力がその陰にあることを認識すべきではなかろうか。

これに関連して、私の印象に残っている2冊の本の内容を紹介しよう。その1冊は1953年にワトソン・クリックモデルを提唱し、20世紀後半の生物学の目覚ましい進歩の起爆剤になった研究を推進したワトソンが書いた「二重らせん」という本である。この本は、このワトソンが、クリック、ウイルクィンスとともに、1962年ノーベル医学・生理学賞を受賞した後、この画期的なモデルがどのような過程で見出されたかを面白おかしく紹介した本で、まさに生物学の中心的なテーマである遺伝子の本質の解明に若さゆえにしゃにむに突進して、生物学の世界を一変させた研究者の自叙伝とも言える本である。しかも、このモデルの提唱に至る過程で必要なX線回折による実験結果は、当時ワトソンの研究室の近くにある研究所にいたフランクリンというユダヤ系の若く美しい聡明な女性研究者の測定結果を本人の了承なしに手に入れており、そのデータが手に入らなければ、このワトソンとクリックがモデルを世界で最初に提唱できたかどうかは微妙なところである。

もう1冊の本は、上記のフランクリンの生涯を伝記風に書いた「ダークレディと呼ばれて」という本である。このフランクリンは、科学の世界で女性が活躍する際の困難さを克服するためもあったと思われるが、他に対しても非常に厳しい一面を持っており、後にワトソンらとともにノーベル賞を授与された上司のウイルクィンスと衝突しており、このフランクリンが別の研究所に移るときに、ウイルクィンスがクリックに手紙の中で「ダークレディが出て行く」と書いていることから犬猿の仲であったことがわかる。彼女はその後にも非常にいい研究を進めていたが、X線の影響が1958年に37歳の若さでがんでなくなっている。ワトソンらがノーベル賞を授与される4年前のことである。

華やかなノーベル賞の陰にはこのように多くの人たちの目立たない地道な研究の積み重ねがあることにも思いを致し、そのような研究にも日があたるような対応を期待したいところである。

「二重らせん」 ジェームス・ワトソン著 江上不二夫/中村桂子訳 講談社文庫

「ダークレディと呼ばれて」 プレンダ・マドックス著 福岡伸一監訳 鹿田昌美訳 化学同人

本学附属図書館の課題

図書館長 奥 田 勉

本学附属図書館は「快適な学習空間とリフレッシュ空間の創造」を目標に、図書館利用者を増やすためのいろいろな取組を行ってきた。しかし、教職員の旧態依然とした図書館認識や本学を取り巻く環境変化などのために思うようには達成できていない。今回「図書館便り」に投稿する機会を頂いたので、図書館への思いを改めて巡らせてみた。

大学の中で図書館がどのような役割を担っているかは、その大学における図書館の位置付けから明らかである。本学では、附属図書館規程の設置目的に、「教育並びに研究に必要な図書及びその他の資料を収集、整理保存して、利用者の便に供すること」と記載されている。これは昭和42年に制定されたもので、図書館機能の基本は示しているが、制定から40年も経た今日では完全にはマッチしていない。時代の移り変わりとともに、図書館機能は常に発展させる必要がある。大学が高等教育と学術研究を行う処である以上、教育と研究のどちらかに重点を置くにしても、図書館は大学の中心的な施設として整備されなければならない。図書館整備は、単に図書や資料の蔵書数を増やすだけでなく、施設・設備を含めて利用者の多様な要求に対応できるように充実する必要がある。図書館の充実度はその大学を評価する重要な指標であると言っても過言ではない。図書館は永遠に継続して整備することが求められている。

本学では、図書館の役割は残念ながら余り期待されていない。大学改革や大学の授業改善、学生の学習改善等に対して、図書館が果たす役割や図書館の活用などを検討したということはほとんど聞いたことがない。大学設置基準によって義務付けられたFDによる組織的授業改善や授業評価アンケート等による授業改善の努力がなされているが、授業改善への図書館の役割は無視されている。あらゆる水準の高等教育には図書館の関与は避けられないものであり、学生が図書館を利用して自ら学習することによって自立的な判断のできる学生に育っていくことが大学の大きな役割であるにもかかわらず、それが十分に行われていないのが実情である。図書館の能動的な大学改革や教育改善への関与が今後の検討課題である。

昨年末に、中央教育審議会は「学士課程教育の構築に向けて」という答申を出した。その中で学士力を培う一つとして汎用的技能をあげ、情報リテラシーなどを示している。情報リテラシーは情報活用能力（情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質）である。本学でも教養科目として授業が行われているが、情報手段（特にコンピュータ）の特性の理解、基本的な操作能力の習得に重点が置かれている。本来は、必要とされる情報を効果的・効率的に探し出し、精査し、そして活用できる能力を意味するので、図書館はそれに積極的に関わらなければならないはずである。これも今後の課題である。

本稿では本学図書館の目下の最重要課題である高騰する外国雑誌の購入について書くつもりであったが、未だその解決策を見出せないの、上記のような大きな課題を持ち出す羽目になってしまった。毎年高騰する外国雑誌の購入について良い対策案をお持ちの方は是非とも教えてくださいますようお願いいたします。

分館長に任命され十年が経過

現代社会学部分館長 沼野治郎

1999年現代社会学部が開設されて以来、同学部附属図書館の分館長として10年間その責務を担う機会に浴することになった。と言っても実務は専任の司書が全て執り行ってくれるので、私の役割は分館の運営が滞りなく行われるのを見届けることであった。8年間二井家泉さん、そして最近2年間羽鳥靖枝さんの経験豊かな手腕に支えられて無事に解任される日に至ることができそうである。また、この間5人の非常勤職員が図書館で働かれた。彼女たちの働きに感謝する。

学部開設当時上瀬野の新しくモダンな建物の1階半分を占める部分に図書館があてがわれ、今日に至っている。中野秀一郎教授が赴任前用意されたリストにもとづいて、社会学の分野を中心に書籍・資料が整えられて、分館がスタートした。私は女子学生にもくつろいでもらえる雰囲気を用意しようと、花と果物の静物画二点をアメリカの女性画家（アメリカに住む娘の義理の母）に依頼して飾ってもらうことにした。

私が米国ブリガムヤング大学に留学していたとき、図書館がいろいろな展示を行っていたのを思い出して、分館でも毎年なんらかのテーマをもとにささやかであるが展示を行ってきた。最初は「イスラム文化を知ろう」と題して書籍・文物を用意し、広島大学に留学していたモロッコ人の院生を招待し、話をしてもらった。

近年、大変残念なことであるが、入学者の減少もあって学生の利用者が下降傾向にある。せっかく充実してきた図書が学生と教員の利用を静かに待機している状況である。今後学生と教職員の皆さんが図書館を積極的に利用されるように願っている。

ところで最近では先生方も学生たちも図書館に行かなくても、インターネットを検索、またはダウンロードすることによって情報や資料が容易に入手できる時代になっている。そのことが利用者減につながっていると思われる。そこでこのような時代に大学図書館の果たす役割に変化が生じ始めている。それは、大学の教員がインターネットを利用して論文やまとめた資料などを公開しようとする動きである。「機関リポジトリ」(institutional repository)と呼ばれるネット上の文献アーカイブに置いて学外を含めた研究者や学習者の用に供することを目指している。80余りの大学がこうしたサイトを持つにいたっていると言う(杉田茂樹「ネット時代の大学図書館活動の新機軸」『言語』誌2008年9月)。広島県では複数の大学が共同でこのような文献アーカイブを設け、本学も他の10大学と共にそれに参加している。(「広島県大学共同リポジトリ」HARP: Hiroshima Associated Repository Portal <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp>)

本来論文は読んでもらうために発表(publish)するものであるから、この研究論文公開ファイルに掲載しないでほしい、と断ることがあるとすれば理屈から言えば自家撞着に陥ることになる。本学からの掲載が今後一層増えていくことを期待している。

上瀬野の四季* 随想

自動車短期大学部分館長 益 永 茂 治

私が本短大に勤務して満6年、研究室は上瀬野キャンパスの丘の南端に位置する6号館にある。私はこの5階の窓からの風景を眺めて飽きない。キャンパスは緑に囲まれ、研究室の窓の直下に正門が位置し、これに向かって「自短坂」の4連のヘアピンカーブが続きスクールバスがのんびりと登り降りしている。その先、県道への接続点近くに上瀬野の里の集落が見え隠れしている。西の方、県道を跨いで瀬戸内海を隔てるやや急峻な山塊があるが、地図にも名がないので私が双子山と名付けた特徴ある双連の山峰がそびえている。

春は柔らかい日差しに木々が萌え出し校地周辺に植えられた桜が一斉に花開く。うっすらと春霞にかすむ周辺の山々は萌黄色の若葉に包まれて行く。やがて里の田圃に水が入ってキラキラと陽光を反射するようになると田植えとなって、やがて梅雨。夕暮れにはあちこちから蛙の鳴き声が聞こえて来る。時には、雨上がりの霧の里から短大の丘までの谷あいを見守る白鷺が数羽、気流に乗ってゆったりと昇って来たりする。そして長雨が止み、田畑や山々は深い緑に覆われ山の端には入道雲がむくむくと湧き上がってジージーと蝉が鳴く夏となる。里の稲が黄金色に色付き始めると秋が深まり、稲刈りが終わった夕暮れ時に稲わらを焼く煙がゆったりと里に漂い、はぜや楓が色付き始めると冬はもう直ぐ。そして冬は時として吹雪に見舞われ、この上瀬野の穏やかな光景は一変する。毎年、数回は道路に積雪を見て朝方には自短坂がカチカチに凍結する。そのような朝は決まって空気は透き通り、雪に覆われた双子山が白く輝いて意外に近くに見えるようになる。時おり、自短坂の谷あいから吹き上げて来る寒風は校舎に阻まれ、ビル風となってピューピューと恐ろしい笛吹き音を鳴らす。そうして、また桜が咲いて春が巡って来るのである。

ホームページ担当になったとき、自動車短大の沿革を掲載するため、「広島電機大学70年史」や短大創立20周年記念誌「20年を顧みて」などを調査した。この際、現西本名誉学院長を始め当時の理事会や法人関係者は筆舌に尽くせぬ苦労の上に、先ず短大、続いて大学を創設されたのであるが、短大創立の直後に将来を見越して上瀬野の地に36ha余に及ぶ山林・農地を取得されていたことを知った。校地や進入路造成の際も理事会や工事会社など関係者が一番気を使ったのは必要最低限以外は極力自然環境を損なわないことであったという。このようにしてこの丘は地域との共生を図りながら緑に囲まれた勉学には最適な環境となったのである。

また、短大設立の条件の一つに図書を整備があり、書籍の収集にも苦労されたことが記されている。私も図書分館長として蔵書の整理に立ち会う中で、当時の教員や知人・企業などから多くの寄贈図書があったことを知った。昭和39年（1964年）の短大設立当時の蔵書数は教養及び専門書7,012冊であったが、平成8年（1996年）に28,000冊となり、今では36,000冊を数え自動車関係蔵書数では西日本一となって、書庫の確保もままならない状況となっていることには感慨深いものがある。

冒頭に記した朝な夕なに眺めて来た四季折々の豊かな自然と短大の歴史はこの様に多くの先輩方のご苦労の上に成り立っていることを銘記したい。そして、この伝統を踏まえて未曾有の困難な時代に短大が直面する課題に挑戦して、私たちがまた新しい歴史を築いて行きたいと思う。

*注) 短大ホームページトップの「学歌」の背景に組み込んであるので参照頂きたい

読書感想文コンクール〔優秀賞〕

『生態系ってなに?』を読んで

バイオ・リサイクル学科 4年 小 泉 雄 紀

今年は例年より多くの本を読んだ。その中でもよかったと思う一冊が、この『生態系ってなに?』である。

自分は生態系というシステムに強く興味を持っており、資格の勉強や野外での活動を通して自分なりに学んできたつもりだ。そのため、この本を手にとったのはそのタイトルにある「生態系」の文字に惹かれてのことだった。タイトルの3文字に惹かれると同時にそれに続く言葉がこの本に自分が満足できるだけの新しい知識が含まれるかと自分を心配させた。しかし、結果は心配に反して、十分に満足できるものだった。その主な理由は恐らく、著者の研究経験や知識が生かされた具体例が豊富だったからだろうと思う。

この本は5つの章で構成されており、それぞれで「生態系の役立ち」、「物質的な生態系」、「利己性」、「淘汰」、「近年の生態系に関わる問題」についてまとめられている。

第1章では生態系の基本的な役立ちについて述べられている。この章のキーワードを挙げるのであれば、それは食物連鎖であろう。日光からエネルギーを得て有機物を合成する生産者と、生産者を食べることで別の有機物に作り変える消費者、そして、生産者や消費者が利用できなくなったものを分解する分解者に関して解説し、それによって、食物が作られ、不要物が分解されているという話である。

第2章は生態系内での窒素やリンといった物質や、物質という形で蓄えられているエネルギーの動きについてまとめられている。一言に生態系といっても実に多様である。単純に海や川、森と大別してもそのそれぞれで有機物の生産効率は異なる。この章では過去の研究報告などから森や海の生態系における物質の循環やその中で有機物合成の効率などが解説されている。

第3章と第4章は生態系というより生態学に近い内容になっている。まず、第3章では生物が自らの遺伝子を残すことを目指した利己的な行動を取っているという説を解説している。その上で一見それと矛盾する、哺乳類などが自分より優先して子を守り育てたり、蜂や蟻が自らの身を犠牲にしても巣を守ったりという行動の理由を近縁度という考えを用いて説明している。次の第4章では競争的な生物同士の関係性についての話になる。前半部では同種間における競争を著者が過去に調査した事例などを用いて説明され、後半部では木の穴に棲む鳥の、巣の確保に関する話を通じて異種間の競争について書かれている。

本文の最後の第5章では共生をキーワードに、生態系のバランスを調べたいいくつかの実験と1つの種の生物が絶滅することで招かれる生態系への影響の大きさ、そして近年発生している生態系の問題とその対策についてまとめられている。

自分がこの本を読んで特に印象に残ったポイントは大きく2つに分けられる。

1つは鳥類を中心とした生き物たちの多彩な生き方の紹介である。著者は動物生態学と動物社会学を専攻し、本文を読む限り、その中でも特に鳥類の研究をしているらしい。そのため、本文では鳥類の生き方を具体例として話が進められることが多い。印象深い具体例の1つに第3章のエナガのヘルパーがある。つがいを持たないエナガはつがいをもった別のエナガの子育てを手伝う。これをヘルパーと呼び、エナガ以外の鳥でも同種に対してのヘルパーになる行動が確認されている。ヘルパーになる個体は、そのつがいの巣立った子供である場合もあるが、そのエナガでは全く血縁でない、群れの外から来た個体である場合もあるようだ。これにはエナガなりの思惑があるようだが、鳥たちも人間のように血縁に関係なく子育てをするのだということ面白く思った。

もう1つ印象に残ったポイントは、著者の学生時代の調査方法だ。この本では著者の研究の結果を事例に持ってきている場合が少なくないが、その事例が持ち出される時には思い出話のように、このように調査したという話が持ち出される。生態系のことだけが知りたい場合、このような話は不要に思う読者もいるだろうが、自分の場合は例えば、瀬野川の生態系を調べる時にこの方法をこんな風に使ってみたらどうか？などと考えてわくわくした。

生き物好きな自分にとって、この本は具体的な例として多くの生き物が取り上げられていて退屈させられることがなかった。しかし、それは自分に生態系を科学することの難しさを改めて実感させたように思う。著者は「はじめに」で以前おこなった講演後、参加者から「自然番組をみているようで面白かった」と言われ、科学の研究として聞いてもらえなかったと感じたことを書いている。自分がこの本を面白いと思ったのもやはり自然番組を見たときの面白さだったのではないかと読み終わって思った。また、生態系は地域ごとに条件が異なっていて一般化が難しいことも実感として持っている。これら2つのことを含めて、この本を読むことで生態系を科学することの難しさを強く感じた。

「天守物語」を読んで

情報デザイン学科 4年 高村正晴

僕が小学生くらいの頃、近所で飼われていた犬に夢中になっていた頃がある。その犬はいつも外の庭に放し飼いにされていて、人が来ても顔を上げるだけで、ほえる姿も想像できないほど物静かで大人しい犬だった。僕はしばしばその犬に近づいては、少しでも自分に懐いて貰おうとお昼のお菓子やら果物やらをあげて食べさせていた。(人の家の犬に勝手に食べ物を与えてはいけないなんて、その時は思いもしていなかった。)そして、結果的にその犬は僕に非常に懐いてくれた。泉鏡花の「天守物語」を読みながら、僕は不意にそんな昔の頃のことを思い出していた。

「天守物語」は、封建時代の晩秋、白鷹城天守閣に住む妖怪の姫・富姫と、下界の姫路城の殿様に仕える武士・姫川図書乃助との恋を描いた話である。ある日、姫路城の主人である播磨守が鷹狩りに出かけ、一羽の見事な白鷹を捕まえるが、天主からそれを見ていた富姫は播磨守からその白鷹を奪い取ってしまう。後日、富姫の住む天守に、播磨守から鷹を取り戻すよう命を受けた姫川図書乃助がやってくる。正直で、爽やかな心を持つ図書乃助に、富姫は恋心を抱いてしまう。富姫は傲慢な人間の世を捨て天主に留まるよう説得するが、図書乃助は人間の世の未練を断ち切れない。富姫は仕方なく、天守に来た証拠に播磨守代々の家宝である兜を持たせて図書乃助を下界に返す。しかし、図書乃助は播磨守に兜を盗んだ冤罪を着せられしまい、かつての仲間である武士たちに命を狙われ、再び富姫の待つ天守へと逃げてくる。富姫は図書乃助をかまくまうが、二人は討手に傷を負わされ、視力を失いお互いの顔が見えなくなってしまう。討手が去った天守で、盲目となった二人は互いに“愛の死”を覚悟する。

富姫と図書乃助、妖怪と人間が恋に落ちるこの物語はファンタジーだが、そこで語られていることに僕は色々な疑問と共感を見つけることが出来た。

富姫は人が訪れたら生きては帰れないと言われる白鷹城天守閣の姫であり、彼女は人間を食べることもある妖怪である。よって彼女は人間を自分と同格とは思っていない。富姫が播磨守から白鷹を奪い取る行為は、人が猫からボールを取り上げるような、もてあそび楽しむような感覚なのだろう。むしろ富姫にとって人間は、疑り深く、卑怯で、臆病な、我儘な生き物である。富姫は鷹を取り返しに来た図書乃助に、威厳を持って言う。

「鷹は誰のものだと思います！ 鷹には鷹の世界がある。人間は思い上がり、つけ上がりをしています。あれは決して、人間の持ち物ではありません。」

僕はこの言葉を読んでざくりとした。それは、富姫の言葉は正しいと共感できるのに、それを僕たちは実行できていないからである。僕の家では、毎年お彼岸の時期になると、家族揃って先祖のお墓

参りに出かける。その時僕らは必ずお墓の周りをきれいに掃除するのだが、場所が田舎の山奥にあるお墓だから、いつも周りには名前も無いような小さな草花が咲いているのである。僕らはそれを見ても、「花には花の世界がある」と言って、花を摘むことを止めることをはしない。自分たちの都合が悪ければ、花をその場から引っこ抜いてゴミとして捨ててしまう。それを僕は少なくとも数十年繰り返してきたし、おそらくこれからもそうしていこう。この自分勝手な、都合主義とでも言うべきものは、僕ら人間の習慣、生き方そのものに溶け込んでいるのである。そのことに気付かされて、僕はショックを感じたのである。

富姫のこの言葉に、人間である図書乃助は沈黙し、答える。「美しく、気高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。貴方にはお答えが出来かねます。」富姫は、もしも自分の言ったことが少しでもわかるのであれば、どうかここに残ってほしい、そう図書乃助に頼む。しかし、図書乃助は人間の世界に未練があり、富姫は仕方なく図書乃助を人間の世界に帰す。図書乃助が去った後、富姫の側近の一人が、富姫に尋ねる。姫には人間以上の富と力を持っておられる、それなのに、なぜみすみす帰すようなことをしたのかと。富姫は答える。

「力で人を強いるのは、播磨守なんぞがやること。わたしは、あの人の心がほしい。」

富姫にとって、力で引き止めることは人間のやること、つまりは醜きことなのである。しかし、僕はその富姫の考えに少し疑問を感じてしまう。力によって人の心を引き寄せることは、そんなに悪いことだろうか。例えば、何かをしたら褒美を与えてやる気を出させる。野良猫がいたら餌を与えて懐かせる。そのことが、富姫にとっては間違いなのだろうか。人は多少なりとも自身の損得、物欲で動いている部分が必ずある。人を動かすために、ギブ&テイクの条件をつけることは珍しいことではない。むしろ、それは僕らの周りで繰り返されている日常的な光景である。逆に、何も無いのに相手にこうしてほしいと頼んで、その通りに人が動いてくれるということは、とても稀なことではないだろうか。僕から見たら、富姫はわざわざ難しい方法をとっているように思えてならないのだ。

しかし、それでもあえて富姫はそちらを選択し続ける。昔の僕のように、犬に懐いて貰いたいからといって餌をあげることは決してしないのである。それが富姫の、この物語で語られる者たちの美意識なのである。

物語の最後で、富姫はついに図書乃助の心を勝ち取り、その代償に目の光を奪われてしまう。そして、最後に二人は美しい人々として締め括られる。僕には富姫と図書乃助が美しい人なのかどうかはわからない。ただ思うのは、もし昔に戻れたのなら、僕はあの犬と違う方法で仲良くなりたいと思うだけである。それは決して、餌付けが悪いとか間違っているとか、それをしたことに後悔しているというわけではない。ただ、あえてその方法を選び続けた富姫の、理想を追い続けるその純粹さに、僕は憧れを抱いてしまうのである。

「チーズはどこへ消えた？」を読んで

バイオ・リサイクル学科 4年 浅井俊彦

「チーズはどこへ消えた？」

この物語のチーズとは、我々にとって人生で求めているものに相当する。チーズは時間が経つにつれ、古くなり、やがて無くなるので、その前に新しいチーズを求めよというメッセージが込められている。

一度この物語を読んで、自分にとってのチーズにしがみついていることは無いか検討してみるのも良いだろう。例えば、これまでの働き方でいいのだろうか、いつも同じ人に頼ってはいないだろうか、お金の使い方はこのままでいいのだろうか、単調な暮らしを毎日繰り返してはいないだろうか。チーズの数だけ検討する箇所はある。自分の事を少しは客観的に見ることが出来る機会になるのではないだろうか。

自分の身の回りや社会、世界では常に大なり小なり変化が起きている。今まで、自分がしてきたこ

とが徐々に通用しなくなることだってあり得る。自分の人生で上手くいかないことは無いが振り返る事も必要だろう。心当たりがあるのなら、それが古いチーズということである。例えば、成績が悪くなり始めたら、勉強方法を見直してみる。人が段々と自分から遠ざかっているように感じ始めたら、コミュニケーションの仕方に問題は無いか確認するという具合に。

自分にとっての問題点が分かったとしても、いつまで経っても自分を変えることが出来ないならば、それは、今までの生き方に依存しているか、面倒だから明日すればいいと自分を甘やかしているか、立ち向かう勇氣より傷つくという恐怖が勝っているという原因が殆どでは無いかと思う。これらは自分の努力で克服するしかない。物語の中では、どうすればいいか書かれている。恐怖がなかったら何をするだろうと考えてみることに、新しいことに挑戦する自分を具体的に想像すること、新しいチーズを獲得して幸せになっている自分を想像すること、今まで依存していた古いチーズに見切りをつけることである。これらを実行したことが無いなら試してみる価値はある。

短い物語のため、物語に登場する小人のホーは考え方を改めたのちに、少し探し回ったら大量の新しいチーズを見つけて幸せになるが、人生はこの物語のようにすぐに新しい大量のチーズを得ることは出来ないだろう。苦労の連続だと思し、次第に不安になることもあるだろう。悩み始めたら、新しいことに挑戦しているということ、少しずつ自分が成長していること、周囲の反応が変わってきていることを確認し、進歩を実感すれば、明るく楽しく努力を継続することが出来ると思う。

最後に、話は飛躍するが、我々は、一日の全てを過酷な労働で過ごすこともないし、飢えや蔓延する病気のために一日を生き延びることが精一杯というようなことも体験していない。今現在のところ、そういう世界に住んでいるからである。自分を改善する時間なんて世界の誰よりも持っているはずだ。不平や不満を言う人を見ていると、惜しい時間の使い方だと感じるし、複雑な思考が出来る頭の無駄遣いだと思う。そんな事よりもどうしたら今より良くなるだろう、改善できるだろうと、模索しながら前向きに生きた方が賢明である。

行き詰まりの多い人は、この物語を読んで、自分の人生にどう応用できるか考え、新しいチーズにめぐり会ってほしい。

図書館優秀利用者表彰

(平成20年4月1日～平成20年12月末日)

館名	部門	順位	学 科	名 前	貸出冊数	館名	部門	順位	学 科	名 前	貸出冊数	
本 館	娯楽図書部門	1	電気電子工学科	宮崎 聖千	365	現 社 分 館	一 般 図 書 部 門	1	現代社会研究科	後藤 俊文	59	
		2	機械工学科	宮村 翔一	319			1	現代社会学科	高岡のぞみ	59	
		3	機械工学科	河本 拓也	243			3	現代社会研究科	小川 弘法	56	
		4	バイオ・リサイクル学科	杉野 礼	210			4	現代社会学科	岩下佳二郎	34(68)	
		5	総合工学科	馬場 和希	195			4	現代社会学科	養庵 沙織	34	
	一 般 図 書 部 門	1	工学研究科	細川 雄一	181(200)	自 短 分 館	一 般 図 書 部 門	1	自動車工業科	藤本 裕之	98	
		2	情報デザイン学科	高村 正晴	111.5(131)			2	自動車工業科	加藤祐太郎	51	
		3	工学研究科	今木 靖人	93.5(110)			3	自動車工業科	平山 悠圭	35	
		4	バイオ・リサイクル学科	浅井 俊彦	91.5(92)			4	専攻科(整備工学専攻)	栗田 直紀	29	
		5	工学研究科	一瀬 和紀	85			5	専攻科(整備工学専攻)	政 光	23	
		6	バイオ・リサイクル学科	吉野 寛昭	76			5	自動車工業科	西岡 昂史	23	
		7	総合工学科	渡邊 将浩	66							
		8	バイオ・リサイクル学科	谷川 雄基	52.5(57)							

一般図書部門の娯楽図書は1冊を0.5冊としてカウント。()は貸出総冊数

広島国際学院大学附属図書館発行

- ・本館(工学部・情報デザイン学部) 〒739-0321 広島市安芸区中野6丁目20-1 ☎(082) 820-2536
 - ・現代社会学部分館 〒739-0302 広島市安芸区上瀬野町517-1 ☎(082) 820-3751
 - ・自動車短期大学部分館 〒739-0302 広島市安芸区上瀬野町517-1 ☎(082) 820-3541
- ホームページURL <http://office.hkg.ac.jp/~toshokan/>